

産消交流・CSAでの豚の利用

北海道有機農業研究協議会会長 西 部 慎 三

N町に住んでいる娘家族が、軽いアトピー症状のある孫の卵でお世話になっていることが縁で、この町の有機農業グループと会う機会があった。町の農協にも加入していない自立型の面々である。このグループの共通項はいずれも有機農業に強く志向し、産消交流を基本としているところである。札幌市内から参加した一人を除いて、いわゆる新規参入者のグループであった。

1. M農場の産消交流の養鶏

その中の一人Mさん夫妻は3.8haの畑と0.8haの水田を保有しているが、この土地で約三千羽の養鶏を主業としている。Mさんは青年海外協力隊の経験を持ち、農業を楽しむことに夢を描いている。養鶏とともに趣味のアヒル、ガチョウ数羽が農場内を自由に遊んでいて、また犬は趣味と番犬を兼ね、数頭飼っている。

鶏の飼い方は褐色系の「もみじ」種を用いて、雌雄混合の平飼い、飼料は自家配合で、ラジノクロバーを栽培して鶏が食べるだけ刈り取り、給与している。

生産される卵は直接消費者に販売するか、有機農産物を特別に重要視する小売店と契約販売している。直接購入に農場を訪れる消費者や小売店を通して訪れる消費者のために、農場内に梅、桜、花等を植えて整備し、消費者に開放している。消費者は農場で鶏やアヒルを見て楽しみ、樹木の下での芝生で遊び、見晴らしの良いこの農場で昼食を

とり、旬の自給野菜のサービスも受けられるのである。

ご存じのように、この種の卵はアトピーにも良いとして、慣行生産の卵の数倍の値段で販売されるのが通常であるが、この農場のように消費者が家族ぐるみで楽しみ、自分の農場のように生産に参加したり、遊んだりのサービスも込みで考えると、下衆な筆者の考えでは決して高い買い物ではないように思われるのである。もちろん、ここに関係している生産者も、消費者も、小売り業者も、サービスの売買を考えているわけではなく、自然の気持ちの交流なのである。

2. M農場の豚飼い構想

Mさんは今、種々な動物を飼う一貫として、鶏だけでは余り気味の牧草を利用した自家用の豚肉生産として、豚も飼いたいと思っているのである。今では昔の話になってしまったが、ヨークシャー種の時代に筆者等は、放牧養豚とか豚用の牧草サイレージの試験をしたものだ。今また有機農業のグループが土地生産の高度利用を追求して、昔の技術を必要とするという農業の多様性を再認識させられる。現在の養豚は、繁殖雌豚百頭一貫経営が最小単位の目標で、一千頭一貫経営も珍しくない時代である。畜産の専門家からは、そんなの畜産でないと言われそうだが、新規参入者と言われる農業者は、自分の食べる豚肉は農場の生産物を高度に利用して生産しようという、農業の原

点に基づいて考えるのである。

網走のI町で5haくらい規模のある畑作農家では、放牧、牧草サイレージ利用の繁殖雌豚15頭一貫養豚を畑作に取り込んで、堆肥生産と畑作をうまく組み合わせ、長年にわたり安定的な経営を行っている事例もあるので、Mさんの発想もあながち一笑に付すわけにはいかないのである。

3. アメリカ人エップ氏のCSA

このグループにはエップ・レイモンドさんというアメリカ出身の一家が参加している。この農場は畑5haと山林を少し所有する経営である。アメリカやカナダでは日本の産消交流のような農業をCSA (Community supported Agriculture) といっている。大規模工業化された農業では旬のもの、新鮮なものが得られない、農薬を使った農産物しか得られなくなる、その上、地域が疲弊する等に対する危機意識から生産者、消費者が連携して地域を守る農業を進めようとするものである。消費者は生産者と契約し、2週に1回くらい旬の野菜を届けてもらう、そのために生産の始まる前に4~5万円ぐらいの資金を提供する。消費者は契約農場へ体験を兼ね援農に出かけたり、収穫に参加するのである。エップ・レイモンドさんはこのN町でこの生産グループと情報交換しながら、札幌市内の理解ある消費者と連携してCSAを実行しているのである。

この日、エップ・レイモンドさんはビデオを持参して、アメリカのペンシルベニア州の農家の例を紹介した。この農家では、馬、豚、鶏を飼って、

良質でコストのかからない堆肥を作っている。まず、馬小屋の糞尿の落ちる所に穴を掘り、ピートモス、藁、過石を入れる。よくしみこんだら、それを豚小屋に運ぶ、豚小屋では野菜屑も豚の餌にする。そうして堆肥の山が1mぐらいになったら棒で堆肥に穴をあけ、トウモロコシの実を穴に入ると豚は鼻で堆肥の山をひっくり返し、堆肥の切り返しの作業を豚にやらせるというのもある。その後に鶏を放飼する、鶏は豚の食べ残しをきれいに食べるというのである。もちろんこの農家では、馬は農作業用に、豚は肉用に、鶏は卵の生産に飼われているのである。

ペンシルベニア州の農家の例は日本でかなり一般化している、発酵床のハウス養豚に近い方法である。ここでは発酵床は馬の糞を基に作り、豚を出荷した後に鶏に利用させるところが違っていると見ることができる。

大規模、企業的技術を指向している研究会誌に自家用の豚肉作りの話で申し訳ないが、道立滝川畜産試験場で発酵床ハウス豚舎を用いたSPF豚の肥育試験では、同場の隔離条件でも豚が正常に育っていたことを記憶している。先に紹介したM農場の自家用の豚飼育構想では、放牧等を通して消費者に豚を理解してもらうことも考えているのである。M農場では特定病原菌から隔離されている条件でもあるので、このように自家用として楽しみながら飼う、豚飼育の農場にもSPF子豚の割愛に協力してもらえると有り難いと思うところである。